教 会 月 報

2019年3月

No.３３４

岡山ナザレン教会 月報編集委員会

三本の十字架

「イエスを十字架につけたのは午前９時であった。罪状書きには、『ユダヤ人の王』と書いてあった。また、イエスと一緒に二人の強盗を、一人は右にもう一人は左に付けた。・・『他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら信じてやろう。』一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。」マルコ福音書 15：25―32

キリスト教会には必ず十字架があります。塔や会堂内に見いだされます。なぜならば、神の遣わされた救世主イエスが人間によって殺された事によって救いが起こった原事実だからです。

毎年、3 月～４月にかけて神の独り子イエス・キリストの受難日(受苦日)の時期を迎えます。と言いますのはイエスの十字架刑の死と 3 日目に復活されたイースターを移動祝日としているからです。制定されたのは西暦 325 年現在のトルコ、ニカイアで開催された東西両教会共通の総会議でした。それまで混乱していた復活日(イースター)を、『春分につぐ満月の後の最初の日曜日に守る』と決定されたのです。それ以来、世界の教会は一部を除いてこれを守ってきました。

さて、イエスの十字架と共に両側にも十字架がありました。それらの犯罪者は単純な強盗犯ではなく、当時の政治に反対した者とも言われます。イエスはユダヤ民族のメシアとしてローマ支配からの脱却を夢見た人たちがいました。しかし、イエスは世界の秩序を混乱させ、世を支配することではなかったのです。それよりもご自身、人間が負いきれない罪を担い十字架を負うことにより父なる神に与えられた使命を全うされたのです。

その場にいた人々と共に祭司長や律法学者たちも代わる代わるイエスを侮辱した。イエスの両側につけられた者もイエスを侮辱したのでした。

罪とけがれなき神の子羊であるイエスは、人間の犯した罪を贖うために十字架で死んでくださったのであります。　　牧師　永松　清

2019年3月の行事予定表

1	金	世界祈祷日(岡南教会)	16	土	
2	土		17	日	伝道礼拝式、役員会、各会の例会日
3	日	礼拝式、聖餐式、奉仕の日	18	月	
4	月		19	火	
5	火		20	水	
6	水	(灰の水曜日)、聖書の学びと祈り会	21	木	祈祷会
7	木	祈祷会(証し会)	22	金	朝の祈り会
8	金	朝の祈り会、　　教団年会(大阪)	23	土	
9	土	8-10 日、年会開催。	24	日	礼拝式、各部会。
10	日	受難節、礼拝式	25	月	
11	月		26	火	
12	火		27	水	聖書の学びと祈り会
13	水	朝の祈り会	28	木	祈祷会
14	木	聖書の学びと祈り会	29	金	朝の祈り会
15	木	祈祷会	30	土	
			31	日	賛美礼拝式、

３月お誕生・洗礼記念日の皆様、おめでとうございます。

編 集 後 記

◇ ２月 24 日（日）午後、西川アイプラザホールで、マダガスカルの子ども医療支援のためのチャリテイコンサートに行きました。わが教会の聖歌隊メンバー二人と坂本氏で津島 ‘S というトリオが出演するというので牧師夫妻と数名で応援に。美しいハーモニーに聞き惚れました。

◇ 今号の山内章子さんの証し『神様が新しいことに導く時、①平安があること②みことばをいただいていること③環境が整うこと。この３つがそろって初めて Go サインがでたといえる』のこともハーモニーだなぁ、と思いました。

◇ 聖書のことば「神のなさることは、すべて時にかなって美しい」（コヘレト３：11）が耳の奥で聞こえたような気がしました。

各会のメンバーです！

「違いを超えて」

JOCS ワーカー　山内章子さん報告会

去る 2 月 3 日（日）15:30 より JOCS（キリスト教海外医療協力会）から 11 年半にわたりバンングラデイッシュへ遣わされた山内章子さんのお話しを伺いました。

前半はこの働きに入るまでの足跡、神様の語りかけと応答についての証しでした。神様の導きという縦糸の中を、経験したこと出会ったこと自分の興味や望み等様々なものが、が表に出たり裏に潜んだりしながら一つの織物が紡ぎあげられるように仕上がっていく、そんな様を見る思いがしました。神様が新しいことに導く時、①平安があること②みことばをいただいていること③環境が整うこと。この 3 つがそろって初めて Go サインがでたといえる、と言う牧師先生の言葉の通りに、最初の神様からの声を聞いてから 10 年余の時の中で整えられて遣わされました。活動報告の 1／3 が行く前のことに占められましたが、ここを知ることで、様々な種が後に芽を吹くことに気付かされます。

バングラディシュのマイメンシンという町の施設での最初の働きは、障がいを持った子どもへの理学療法の治療の手法を伝え、更に村々に広めるというものでした。国際協力団体が良い物や技術を持ち込んでも、その団体や人物が帰国すると消えてしまうということはよく起きることでした。伝えたことが直ぐ実践されなくとも、地道に伝え続け、「彼ら自身がそう望み行動出来る」まで待てたことは本当に良い経験になったとのことでした。

また、言葉が上手になるにつれて、障がいを持った女性達が話してくれるようになり、一人一人が持つ悲しいストーリーにも触れることとなりました。女性が男性の保護と支配の中にある社会で、障がいを持って生まれてきたということは大きなハンデーで、隠れるように息を潜めて生きている、そんな一人一人を見つけ出し連れ出し、技術を身につけさせ大切な一人なのだと思えるように寄り添い支える働きでした。その施設は彼女達にとって価値ある一人の人間として認められる「家」となっていました。そんな中その家の存続の危機が起きます。そこを使いたい人達からの追い出すための嫌がらせや弾圧が起き、その場所の使用が危ぶまれてきました。次々多くのことが起きる中である時「敵を愛し迫害する者の為に祈りなさい」と語られ、自分の祈りが悪口と恨みに満ちていたことに気付き、そこで一緒に奉仕するイスラムのスタッフにこう言ったそうです。「聖書にはね敵のために祈れって書いてあるの。私たちそう祈ったらいいと思う。この状況は私たちには変えられない、神様にしかできない」と。そのスタッフも賛同し、「家」のメンバーはヒンズーやイスラム、クリスチャンと背景は様々でしたが、一緒に集まり立ち退きを迫る人の名前を一人一人あげ祈るようになったそうです。そして奇跡は起きました。使用を決定する会議で、全員一致でこの施設を女性達のために使うと決まったそうです。

「JOCS で大切にしているのは「みんなでいきる」ということです。垣根無くひとつの心になって祈る時にみんなの心の中にイエス様の心が宿りそこから何かがかわるのではないか、と思っています。（山内）」　　（文責：編集部）

2019 年「信教の自由を守る日」集会
《いちゃりば》を求めて
～みんなで考えよう、共に生きるために～

講師：日本キリスト教団 箕尾教会（大阪）上地武

夜明け前からの雪は止んだものの、寒さ厳しい 2 月 11 日（祝）。午後 2 時より市内外の教団教派をこえて約 60 名の方々が当教会に集われ、講演（約 90 分）と質疑応答（約 30 分）のひとときを過ごしました。

上地（かみち）師による自分史では、米軍統治下の沖縄に生まれ（1962 年読谷村）、沖縄史を学び、基地問題に目覚められ、牧師になられた経緯を語ってくださいました。続いて、沖縄と天皇制、沖縄の現状（不発弾、辺野古基地問題、差別、軍用地問題など）と可能性（観光、文化、芸能、スポーツなどでの立県）について、B4 三枚の資料で詳しく紹介くださいました。

日本国民として一人一人が平和憲法の下で大切にされることはもちろん、私たちはキリスト者として、99 匹より 1 匹の羊を大切にしたい。（マタイ福音書 18:10~14、ルカ福音書 15:3~7）沖縄の歴史的そして現実的な苦しみを兄弟姉妹として共に分かち合ってほしい、と結ばれました。

A.Y. 姉

2 月伝道礼拝証し

私は特別支援学校で教師をしています。4 月に肢体不自由部門のある学校に転勤しました。同じ特別支援学校でも視覚に障害がある盲学校で教科の授業をしていたのとは全く様子が異なり、教員経験は長いのに車椅子の押し方、介助の仕方など何も分からず、本当に役に立たない自分自身を情けなく、惨めだと思いました。

夏休みに入り腰痛も酷くて、2 学期からやっていけるだろうか不安でいっぱいでした。 心の支えとなったのが、盲学校で取り組んできた実践論文を書くことでした。

英語の授業改革の実践を始めたのが平成 26 年度で、一つ一つ思い返す度に悩みや不安があったのを思い出しました。いつも神さまお守りくださいと祈ってばかりでした。詩篇 55 の 22「あなたの重荷を主に委ねよ。主はあなたを支えられる」。神さまはその都度、私の祈りを聞いてくださいました。英語の授業でマララさんの劇をすると決めた時、管理職に説得すること、授業の形態や生徒のモチベーションなど困難な中にありました。教務や教頭に伝えた時は冷たい反応で、心臓はドキドキ手は震え、冷や汗ものでした。エペソ 6 の 10「主にあってその偉大な力によって強くなりなさい」その後校長にも色々言われましたが、最終的には「思い切りやってみられたらいい」と言われました。

劇の発表の直前には、それまで日本ではあまり知られていなかったマララさんがノーベル平和賞を受けるという本当に奇跡的な出来事がありました。そんなタイムリーな劇の発表には管理職はもちろん、多くの先生が参観して生徒の頑張りに拍手喝采でした。転勤するまでの 4 年間、信じられない程の多くの授業実践ができ、それをまとめた教育論文が優秀賞に選ばれ、先月授賞式がありました。今回の証しをまとめながら、信仰がすべて今の私を造っていると確信しました。

これまでの教育実践をまとめることで心に踏ん切りがつき、もう私の心の居場所は今の学校です。発語のない生徒達が愛おしくなり、彼らの表情や動作から、私を信頼してくれてるのかなと思えるようになりました。神さまが傍にいつも寄り添ってくれる、それだけで不安も怖れもありません。いつも感謝の気持ちを忘れずに、信仰生活を続けていきたいと思います。